

# 序

## 0.1 はじめに

「**L**A**T**E**X** 小説同人制作術」を発行したのは、2010年6月27日でした。それから2年近く経過し、その間にも何冊か小説本を発行してきました。その都度テクニックを磨き、組版技術を向上させてきました。余り分からなかったかも知れませんが、そのノウハウを、この本で解説したいと思います。

その為、この本は「**L**A**T**E**X** 小説同人制作術」の第2章について、集中的に記述した本だと考えてください。基本的な所は同じ記述もありますが、組版に関しては相当詳しく記述しているつもりです。

第1章だった **Vine Linux** でのセットアップ編は、せいぜいフォントの追加方法位しか書いてありません。

第3章だったデータ入稿編も、ほとんどノウハウは向上していないので、記述は少ないです。

詳しく知りたい方は、是非とも「**L**A**T**E**X** 小説同人制作術」をお求めください。まだ在庫有ります。

この本で解説する組版技法は、日本エディタースクールの「文字の組方ルールブックータテ組編」を参考に解説していきます。この本を横に置いておくと、わかりやすいと思います。

ちなみにこの本ですが、amazonで525円で買えます。非常に安価なので、自分に合わなくてもダメージは少ないです。それに図も多くて読みやすいです。

他にも W3C の「日本語組版処理の要件（日本語版）」\*1 というページも参考になるでしょう。

この 2 年、私の同人活動は、『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』に手を出した事が大きいです。この作品は、コバルト文庫の『マリア様がみてる』と違い、電撃文庫です。そして、コバルト文庫と電撃文庫では書体や組版ルールが異なります。

それらを再現させるために、そして組版を（独学で）勉強してみた成果がこの本です。

## 0.2 組版とは

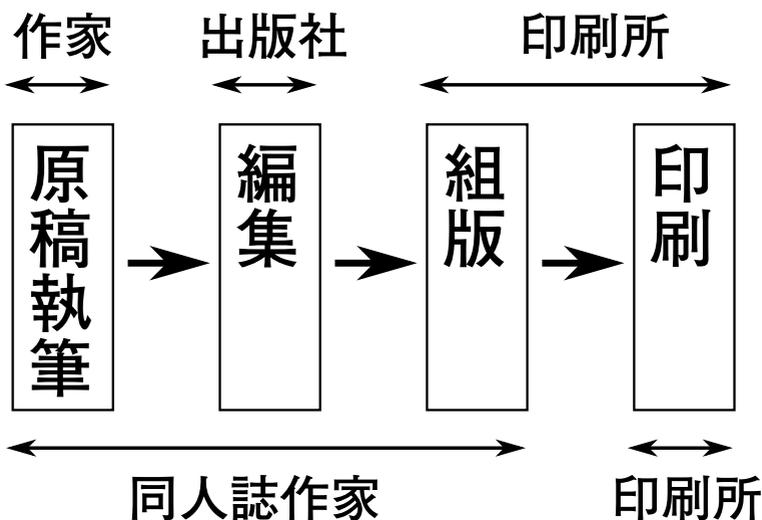


図 1 本の制作行程

LaTeX と言うのは、フリーの組版ソフトです。組版とは、本の制作に迈り、文字や絵を並べて、紙面を作る作業になります。

\*1 <http://www.w3.org/TR/jlreq/ja/>

本の制作の工程は、主に「原稿執筆」→「編集」→「組版」→「印刷」と行った流れになっています。さらに細かく分けると、企画とか、校正・校閲と言った行程があったり、それを元に修正するフィードバックがあります。

商業出版だと、原稿執筆が作者、編集・校閲が出版社、組版・印刷が印刷所が担う事になります。この分担は色々あり、出版社が組版を行ったりする事もあります。文芸誌や自費出版なんかでも、作者が行うのは原稿執筆ぐらいで、編集や組版は任せる場合もあるようです。

同人誌、いわゆるコミケなんかで頒布する本の場合、大抵の場合は組版まで作者がやります。個人サークルでなく、複数人のサークルでは、執筆者と編集・組版者が分担する事もあるでしょうが、印刷所は組版せずに印刷するだけというのが普通です。

何せ組版やって貰うのは当然お金が掛かりますから。色々状況によって異なるでしょうが、10万円以上はするみたいです。

本を活字を並べて作っていた時代、活字を持っていたのは印刷所でした。だから、当時の組版は活字を並べる作業ですが、それは印刷所でしか出来ませんでした。

それが写真植字、写植に変わります。文字盤に逆さで描かれている文字をフィルムに転写して、版下を作っていきます。この機械は数百万円以上し、印刷所が主に持っていました。だから組版作業も印刷所が行っていました。

この組版作業は、写研という会社の機械の場合、SAPCOLと言うプログラムで行われていました。テキストデータに制御文字を埋め込み、文字の大きさ等を制御するというマークアップ言語となっています。L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X みたいな感じですね。

さらに時代が下ると、DTP によって行われます。有名な物では QuarkXPress や InDesign があります。InDesign の価格は約 10 万円と、数百万円する写植機に比べて非常に安価で、Mac や Windows 等、普通の PC で動作します。この価格だと、出版社や個人でも買えるようになり、印刷所ではなく、出版社や作家自身が組版する場合も多くなってきています。

例えば電撃文庫やコバルト文庫は、こないだまでは石井明朝で組まれていました。ところが、最近はリュウミンで組まれている場合が多くなってきています。これは、写研の写植機から、DTP に移った事を意味します。もしかしたら、一部に公

開されているという写研の OpenType フォントや、モリサワの写植を使っている可能性もありますが、低いでしょう。

個人だと、京極夏彦氏が InDesign を使って自ら組版しています。

しかし、自分で組版が可能になったからと言って、印刷所や出版社が組版をしなくなるかと言うと、そうはならないでしょう。何も知らない個人の組版と、プロが行う組版はクオリティに差があります。

「TEX ユーザの集い 2010」で、昔、奥村先生が編集者に「TEX で作ったから綺麗でしょ？」と見せたら、「全然汚い」と返されてショックを受けたと話されていました。二段組みで左右の段が揃っていないとか、インデントや行の幅が全角の整数倍でないとかです。私も「PAC1 マリア様が望む永遠」を出した時、「行が紙の裏表で揃っていない」と印刷所に言われました。

料理は自分でも作れます。でもレストランの料理は美味しいです。この本は、レストランの料理に少しでも近付けるようなレシピのつもりです。

なお、独学ですので、プロの編集・組版者から見ると駄目な所もあるかと思えます。また、手間が掛かりすぎるとか、自分の技術が追いついていなくて妥協している事もあります。その辺はご容赦ください。

そして、 $\text{\LaTeX}$  の特徴の一つは、文章の構造とレイアウトを分離出来る事です。しかし、最終的に美しい仕上げにするためには、仕上がりによってコマンドを変更する必要があります。

ぶら下げ組みやルビを正しく組む場合、行頭や行末等で、コマンドを変更する必要があります。本来ならば行頭・行末を認識させて、コマンドの動作を変更させるべきですが、まだ実現できていません。

だから、A5 で出していた本を A6 で編集し直したり、校閲で文章をいじると、レイアウト用にコマンドを変更する必要があります。これは、もう文章を書く工程と組版の行程は違うものとして、現状諦めるしかありません。